

令和7年度京都市総合教育会議 会議録

1	日 時	令和7年11月10日 月曜日 開会 10時30分 閉会 12時30分
2	場 所	京都市役所本庁舎 4階 正庁の間
3	出席者	京都市長 松井 孝治 京都市教育長 稲田 新吾 京都市教育委員会委員 笹岡 隆甫 京都市教育委員会委員 野口 範子 京都市教育委員会委員 松山 大耕 京都市教育委員会委員 石井 英真 京都市教育委員会委員 濱崎 加奈子
4	関係者等	<京都市関係者> 京都市副市長 吉田 良比呂 京都市総合企画局長 尾崎 学 京都市総合企画局都市経営戦略監 西田 良規 京都市文化市民局文化芸術政策監 平賀 徹也 京都市教育委員会教育次長 春田 寛 京都市教育委員会教育企画監 清水 康一
5	傍聴者	3名
6	議事の概要	

(1) 開会

10時30分、松井市長が開会を宣告。

【松井 市長】

教育委員の皆様方には、日頃から京都市の教育政策についてご指導いただき、また、大変ご多忙の中、令和7年度の京都市総合教育会議にお集まりいただいたことに、心から感謝申し上げる。

本日は「京都基本構想」を一つのテーマとしており、都市経営戦略室から初めにお話をいただく。また、濱崎教育委員には、「京都市総合計画審議会」委員として、京都基本構想

案に関して、多くの意見を寄せていただき、まとめ上げる際にもご尽力いただいた。後ほど、濱崎委員からもお話を伺いたい。

さて、京都基本構想案の序文では、京都の歴史的な位置づけ、山や川に囲まれた自然との共生、そして京都に生きる人々の共同体の三点について触れている。この三つの軸を開き、その軸を序文として、京都の価値の源泉のようなものを示したうえで、本物（ほんまもん）をどう追求するか、夢中と感動にあふれたまちをどうつくるかを論じている。

また、京都には、他都市にない強度・密度で素晴らしい人材が存在する。未来を担う子どもたちの育成のため、京都に関わるこうした人材に、どのように一肌脱いでもらうかが重要である。このことは、価値を並列的に展開した京都基本構想案において、「京都学藝衆構想」という形で具体的に提起しており、私は特に、未来を担う子どもたちの人間力の養成に、京都に住む人々だけでなく、京都に魅せられ、頻繁に訪れる人々の力や磁力を活かしたいと考えている。

これは、学校という場だけでなく、市役所や区役所、場合によっては鴨川や寺院などの場を借り、そろそろ一線引くような方々にももう一肌脱いでいただき、自分たちの経験、あるいは職人芸や文化等をしっかりと伝えていただく。また、子どもたちだけでなく、その方々と子どもたちの間にいるすべての世代が、もう一度学び直し、様々な気づきを得られるような機会を創出する。京都をそのようなまちにしていくことは、京都の文藝だけでなく、京都のまちの底力を支え、場合によっては産業の活力にもつながると考えている。本日は自由で忌憚のないご意見を伺えれば大変ありがたい。

（2）事務局から説明

【西田 都市経営戦略監】

先ほど市長からも、この基本構想案についてお話をいただいたが、私からこの基本構想案の位置づけや概要について、改めてご説明させていただく。

お手元にお配りしている世界文化自由都市宣言が1978年に策定され、京都市のあらゆる政策の最上位の都市理念として位置づけられているが、この京都基本構想案は、その宣言の理想を具体化、実現するために、2050年を見据えた、今後25年の市政の基本方針として策定していくものである。これまで、基本構想を元に、5年または10年の単位で基本計画を作成してきたが、今回は基本計画に掲げてきた都市経営の理念や、京都の未来像といった基本的な考え方等の要素を加え、基本構想と基本計画を統合している。今後の具体的な動きとしては、この京都基本構想が策定された後に、昨年度策定した新京都戦略を改定し、その中で政策を具体化していく予定となっている。

また、この京都基本構想案の内容については、京都基本計画策定審議会において、先ほど市長からご紹介があったとおり、濱崎委員をはじめ、多くの審議委員の方に全8回にわたりて熱い議論をしていただいた。予定時間を大幅に超え、延長を重ねながら文章を磨い

ていただいたが、初回の審議会において、都市名を隠してもこれが京都の基本構想だと分かることのできるような内容にしていこう、京都でしか描けないような価値をしっかりと示していこうという合意がなされた。そのため、冒頭に市長からもお話をあったように、基本構想案の序文において、京都が大切にしてきた、また、これからも大切にしていくべき三つの価値が提示されている。それが序文の最初に記載された、6行の文章になっている。この中で、歴史と文化を介して人間性を恢復（かいふく）できるまち、自然への畏敬（いけい）と感謝の念を抱けるまち、また、自他の生をともに肯定し、尊重し合えるまちという記載がある。簡潔に申し上げると、時間軸や京都ならではの自然観、また人と人とのつながりといったものを、大切にするまちであり続けようという理想を掲げている。

それぞれについて簡単に説明をさせていただく。まず、第一章のところで、基本構想の策定背景を記載している。

第二章では、京都がどのようなまちであるか、どういう価値を大切にしてきたまちであるかといった京都のまち柄を記載している。

第三章では、世界や日本、京都の課題について、それぞれの観点から記載している。

第四章では、こうした課題の上に立ち、これからどういうまちを目指していくのかを示している。まず、京都がこれまで大切にしてきた価値に触れた上で、それを担ってきたお一人お一人を、先ほど市長からご紹介があった学藝衆という観点からもう一度見直している。そのうえで、京都のまち柄を守っていこうということに触れながら、冒頭に序文の中で示された三つの価値に沿って、これから京都のまちづくりの具体的な方向性について記載している。

第五章では、こうした方向性を具体化するにあたり、新しい形の公共のあり方を模索しながら、理想に向けて取り組んでいこうということを記載している。

そして最後は「未来への問いかけ」としている。これは今回の基本構想案の特長の1つであるが、策定にあたり、35歳以下の方を中心とする京都市未来共創チームという会議体を設け、そこから5つの提言をいただいた。その中で、完成形を提示してみんなでゴールを目指すのではなく、庭師のように、100年先を見据えて今をつくる。ゴールではなくスタートをデザインしていくような位置づけにしようという提言をいただいた。基本構想案はこれを拠り所として、みんなで理想を目指していくものではあるが、これから25年先の次なる基本構想に向けて今からスタートを切っていただきたい。この構想をもとに京都のまちはどうあるべきかを考え、それぞれが対話や議論を重ねていただきたいという思いを込めて、最後には「未来への問いかけ」という章で締めくくっている。

（3）意見交換

稲田教育長の司会進行により、意見交換を実施。

【濱崎 教育委員】

ただ今、改めて西田都市経営戦略監からご説明いただきながら思い返していたが、大変な議論を経て答申案がまとまってきた。お話の最後に、庭師のように育み続けるという言葉があったが、このように文章になつてしまうと、どうしても完成形のように見えてしまうため、私自身、気をつけないといけないと思う。

若手の共創チームのお話があつたが、これまで議論してきたことには、具体的な課題や提案がたくさんあり、若い世代の方々から、これらをぜひアーカイブのように残してほしいという強い要望が出ていた。完成形になる前の状態というのは、非常に面白く、議論を進めていくためのきっかけや糸口がたくさんあるため、それを活かせる形があれば良いと思う。

基本構想を議論し、形にしていく中で、私自身が京都のまちを考えた時に、まさに先ほど市長がおっしゃったように、磁力というものがあると思う。私自身、大学生になって、まさにその磁力に引かれるように京都へ来て、こちらで仕事もさせていただいている。磁力の源は何かと改めて振り返ったときに、この「自然、歴史、人々」は、まさにそのとおりだと思う。私が京都基本計画策定審議会で最初に学ばせていただいたことは、「感謝の器としての京都」という言葉である。自然に「ありがとう」という気持ちが生まれるのは、京都の人々に歴史の軸を感じ取ることができるからである。その歴史軸を感じ取ることができる人がいると同時に、自然があり、建物や町並み、着物といった物や環境が京都にはある。日々、目の前の仕事をこなしていく中でも、ふと空を見上げたり、鴨川に佇んだりする時によかったなと思える。目の前のことだけでなく、少し距離を置いて、相手から見たらどうか、ご先祖様から見たらどうかと考える。京都は、歴史と空間の外から見た自分、つまり歴史の中の一点としての自分の位置を、根っここの部分とともに感じ取るきっかけが多くあるまちである、これは、本当にありがたいことで、それを今一度認識することで、京都の素晴らしいところを新たに蘇らせることができるのではないか。

現在、私は大学に勤務しているが、自分のゼミ生の就職先は東京やIT関係が非常に多い。それは大事なことだが、京都に帰ってきてほしいという思いもある。学生も、京都の良さは感覚的にわかっているかもしれないが、その感覚をもう一度示すことが必要だと考える。

次に学藝衆という言葉について、この基本構想の審議会でも様々に議論されたが、最初から大きく入っていたわけではない。しかし、ジャンルや部署ごとに分断されるのではなく、社会・経済・文化・歴史・教育のすべてが循環しなければならないという議論の中で、文化を含め、すべてをつなぐキーワードとして学藝衆が浮かび上がってきた。審議会で具体的に議論し尽くしたわけではないが、歴史的な大きな観点で見た時、今の教育システムも人が作ったものであり、100年、200年の間に変化してきている。また、社会はさらに動いている。だからこそ、京都の千年の歴史で培ってきたものは何か、学びとは何か、藝とは何かを問い合わせ直す必要がある。

なぜ藝なのか、なぜ学なのかを問い合わせながら、社会における役割、特に教育においては、

子どもたちにキャリアを示せるレベルまで育む必要があると考える。私自身が考える中で、学びは多様であり、人生そのものが学びである。藝とは何かを考えると、技術も芸能もそうだが、ずっと学び続けたことが藝になる。学びが生き方に結びつくが、それが藝である。藝と学の循環が社会をつくり、それが教育現場に反映されることが必要だ。

私は伝統文化の研究者として、伝統文化で教育カリキュラムを構築できるのではないかと考えてきた。京都学藝衆モデル校のようなものを作れないかと思う。京都市は、総合的な学習などを先進的に実施しているが、伝統文化の観点から教科を再解釈することで、子ども自身のキャリアにもつながることを示す教育ができるのではないかと考えている。例えば算数分野なら紋様の解析、理科分野なら香りと文学の結びつきなど、工夫次第で作っていけるのではないかと思う。こうした具体的なアイデアを刺激してくれるのが基本構想である。それぞれの分野からでてくるアイデアを具体化し、それを総合し、社会や文化、ビジネス等に還元する循環ができればと考えている。

【松山 教育委員】

先日、市長もご参加された哲学の会議である京都会議の際にも申し上げたが、海外の方に京都の魅力を尋ねると「京都には思想があるから」とおっしゃられる。例えば、ローマやエルサレム、ブッダガヤには宗教はあるが、思想があるといった言われかたはしない。京都にあるこの思想とは何かというの重要なテーマである。

序文の中に「今日においては非合理・非効率と評され得るさまざまな人間的なつながりを保全してきた」とある。戦後は効率性の追求ばかりをしてきており、特に、時間的効率性、金銭的効率性をずっと追求してきたが、学藝や文化はその対極にあると私は思う。非常にお金がかかり、時間もかかる。しかしそれが人間を豊かにし、まちを豊かにし、人間たる喜びを生むのではないかと思う。そこで重要なのが本日のテーマにある夢中と感動である。一見、非効率的・不合理であるが、夢中にさせ、感動を与えるものに真剣に取り組めることが京都の最も重要な価値であり、そこから思想が生まれるのではないかと思う。

京都の価値観について、昔は家庭の中で自然に祖父母や親からシェアされていたが、そうした口伝のようなものがなくなってきていている。少し前に東京で業界団体の懇親会があつた際に上座と下座の話となった。東京では、席順はビジネスの大きさで決まるが、京都では、まちへの貢献を基準に長老が決めるといった違いがある。このように京都では、商売の大きさではなく、祇園祭での活動や商工会議所での貢献など、自分の利益だけでなく京都への貢献が評価される。私も今朝、小学校の旗当番をしてきたが、まちの人はそれをよく見ていて、「ありがとうございます」と言ってくれる。教育の中でこうした価値を伝えることやモデルを示すことが重要であると考える。

次にデータ集の10ページをご覧いただくと、学力と体力の項目がある。京都の子どもたちの学力が高いのは、先生方や教育委員会の努力のおかげで誇らしいが、体力が低い。京

都府の男女の平均寿命は全国トップクラスだが、女性の健康寿命は全国ワーストである。由々しき事態であり、これは女子児童の体力の低さからきているのではないかと考えている。データ集にあるように、小学校5年生の男子は全国平均程度だが、女子は全国でも低く、女子だけが低いこの原因を究明し、改善しなければならないと思っている。夏の暑さで運動しないのか、運動する場所がないのか、原因を含めて取り組む必要がある。知力だけでなく体力が重要であり、長く幸せに暮らすために必要なことである。

もう一点は外国の方との共生について、先日シンガポールからのお客さんが、ゴミを持っていたので理由を聞くと、世界中を旅したが京都ほどゴミ箱がないまちは初めてだという。妙心寺は十万坪でゴミ箱は1つもないが、ゴミは1つも落ちていない。これは日本人が等しく人に迷惑をかけず、自立して行動する教育を受けてきたからだと思う。今、日本の各地で外国の方とのトラブルが生じているが、これはお金や人種の問題などではなく、規律を守れるかどうかに起因していると思う。今後、海外から京都に住む人が増える中で、語学教育も大事だが、より重要なのは規律を学校で教えることである。自分で学校に行き、教室を自分たちできれいにするなど、基本的な規律を理解してもらう必要がある。日本は規律がベースの国であり、これを怠ると問題が起きる。今のうちから教育機会を提供することは京都市にとって重要だ。

【笹岡 教育委員】

京都基本構想案冒頭の「人間は、自然に生かされ、自然を生きている」という部分について、我々が日本文化を海外に発信する際に一番大事にしているのは、日本人の自然観である。もちろん日本文化を知ってもらう、日本は良い文化を持っていると発信することも大事だが、人間と自然は本来不可分であるという日本人の自然観が忘れられがちになっている。人間にとて自然は大切な存在であり、昔のように、お寺の縁側に座り、家の中と外が自然につながっているような考え方方が日本人の本来の捉え方である。こうした価値観を海外に発信することが我々の務めだと考えている。

SDGs もそうだが、人間も動物であり自然の一部だという価値観を皆が共有すれば、人間が暮らしている自然を次の世代につなげることは当たり前である。こうしたきっかけを作るのが日本文化の役目だと考えており、それを基本構想案にしっかりと書いていただいて嬉しく思う。

また、京都の人にはいろいろな考え方があり、それぞれの京都観がある。私はよく「京都は大きな田舎」と言う。東・北・西は山に囲まれ、これ以上広がりのない空間にいろんな文化がひしめき合っている。そこで酒を飲み、膝を突き合わせて一杯の茶を飲み、花を愛でるといった時間を過ごし、友達付き合いや近所付き合いの延長線上で、新しい文化が生まれる素地がある。こうしたことが基本構想案の共同体の部分に書かれている。

先ほど、感謝の話もあったが、私は幼い頃から稽古場に入りしておらず、あるおばあちゃん先生が、花を処分する時に、必ず半紙で包んで、日本酒をかけて清め、時には涙を流

しながら、手を合わせて「美しい姿を見せてくれてありがとう」と言っているところを見てきた。生け花教室では花を美しく見せる技術も大事だが、それ以上に自然への感謝が肝心だと教えてくれていたと思う。そうしたことをしっかりと発信することが重要である。先ほど濱崎委員から伝統文化の教育カリキュラムの話もあったが、これが実現すれば非常に素敵であり、我々もその一端を担えたら嬉しいと思う。

【野口 教育委員】

一ヶ月ほど前、教育委員会議で学藝衆の説明を受けたときは、学藝衆という言葉に違和感があり、私は少々抵抗したと思う。今日それは解決したが、その理由は2つあった。1つは、その時の資料に影響されたのかもしれないが、上から目線だと感じたことである。秀でた知識や技術を持つ人たちから教わるという点が強調されていると感じた。しかし、先ほどの市長のお話で、秀でた芸術や科学の能力を持つ人だけでなく、京都が好きで度々訪れる人、住むことになった人など、そういう人たちも含めて一緒に育っていくものだとお聞きし、この構想の意味が腑に落ちた。

もう一つは学藝という言葉から、文化・社会・教育・伝統・芸術のイメージがあるが、科学という言葉をもう少し強調したいと思っている。今年もノーベル賞が京都から出たが、これは素晴らしいこと。少し前には山中先生のiPS研究も受賞した。誇るべき、科学の最先端を行くのが京都である。基本構想案の記載にもそうした内容はあるが、もう一步踏み込んでいただければ嬉しい。

それから夢中と感動について、私は夢中で研究してきた研究者であり、まさにその俎上に載っている者だと思う。感動はノーベル賞級の結果でなくても、良いデータが出た時に「やった」と思える瞬間がある。大体うまくいかないことが多いので、少し良い結果が出た時の嬉しさはとても大きい。また、北川進先生もよくおっしゃるように、学生と議論するのは非常に楽しく、学生から学んでいるという点を強調されることがある。このように感動は教育の中でも得られるものであると思っており、そういうことも強調していきたい。

最後に、科学と社会をつなぐことについて、これを行うジャンルはサイエンスコミュニケーションと呼ぶ。私は、今、文系と理系の学生を集めて、サイエンスコミュニケーター（科学と社会の架け橋となる人）を育てることに力をいれている。サイエンスコミュニケーションは、元々ヨーロッパ発信で、アジア自体も遅れているが、日本はさらに遅れをとっている。科学と社会を結びつけ、社会全体が科学を理解して押し進めていくことを目指したい。

【石井 教育委員】

京都基本構想案に「都市は理想を必要とする」とあるが、私も社会は理想を必要とすると思っている。今、本当に哲学や思想が欠けた社会になっている。思想や哲学が社会全体に実装されると、社会が生きやすくなると考える。ここに書かれている内容には非常に共

感する一方で、文化や思想、学藝という観点から見ると、危うさも感じる。それは、先ほどもあった上から目線ということに関係するが、文化は上下や高低ではない。学藝や学藝衆をどう定義するのかということが重要である。

それで言うと、先ほど市長がおっしゃった京都の底力ということは非常に重要なと思う。見るからに尖った人もいれば、その周りに、実は少し尖っている人もいる。上下や高低ではなく、対極にあるオープンさや、また、真面目の対極にある不真面目さ、つまり逸脱が必要である。政治は多数派が勝つが、文化は少数派が勝つというのが歴史の教えるところであるが、京都はそこが強みだと思う。松山委員が以前の教育委員会議において、「京都は奇人を貴ぶ文化がある」という言葉をおっしゃったが、それがすごく印象に残っている。これは非常に重要であり、今の日本が生きづらいのは、奇人を貴ぶ文化がないからだ。

加えて、京都は品の良さとやんちゃさが同居している。これは京都大学にも見られる特徴である。品の良さとやんちゃさが共存する場所は、スタンフォードやシリコンバレーなど新しいものが生まれる場所にも共通している。そこから導かれるキーワードは「おもしろい」である。おもしろさがなくなると文化は沈み、活力を失う。京都に憧れて来た私も、京都のやんちゃな部分に引きつけられた。だからおもしろい人を増やし、学藝衆の裾野を広げることが大事だと思う。

具体的には、各地域に学藝衆がいるのかを考える必要がある。公教育である学校はあらゆる地域にある。それとの対比で、学藝衆がいない地域が排除されることがないよう、政治や行政がベースを引き上げ、全体に活力をもたらす必要がある。これが先ほどの京都の底力を上げるということだと思う。そうした観点で考えることが重要だ。

もう一つは、町医者的、専門家的に学校に関わる中で本物（ほんまもん）が重要だと考えている。京都の学校には総合的な学習の時間などで、笹岡委員や野口委員などの本物が学校に関わっており、子どもたちは貴重な経験を重ねている。また、青少年科学センターでは笹岡委員がプラネタリウムで生け花をしたとお聞きし、京都ならではの素晴らしい取組だと思った。こうした機会は貴重であり、他ではありえない。

私はオーセンティックラーニングも研究しているが、体験学習は「with 本物」であるべきであり、これが探究的な学びの本質であると考える。すなわち、本物から教えを受けるだけでなく、本物とともに問題に向き合うことが重要だ。また、教えている人も若い人から学んでいくことでカウンターパートナーのような関係となる。探究学習や社会との関わりの中で、本物とともに学ぶことで、子どもたちはその背中や横顔、手元から学んでいく。これは徒弟制の核心みたいなものである。その上で教育という営みは、初心を見つけさせてくれるところがある。つまり、文化が上で教育が下ではない。教育を通じて文化が問い合わせられる、つまり元々はこうだったということに気づく瞬間がでてくる。伝統文化においてもこういうことをとても大事にされており、学校教育だけでなく社会教育も含めておもしろい大人を増やすことが重要だ。昨年の総合教育会議において生涯学藝社会と言ったが、市職員や教員こそ、京都の施設を自由に使い、学藝衆として、あるいはそれを支えるサポ

ーターとして関わる流れができるとよい。その中で子どもたちも巻き込まれていく、そういう流れができるることを望んでいる。

【松井 市長】

すごく面白い議論がたくさんあった。野口委員が指摘された上から目線という点は、我々が最も留意すべきことである。中には、上から目線でいいという意見もある。京都は、ノーベル賞研究者や人間国宝、文化功労章・勲章を受章した方々が多数いるまちであり、そこから学べることは京都ならではで、京都しかできることである。笹岡委員が中学校で生け花を教える、これは味わい尽くさないといけない。

しかし、先ほどの石井委員のお話とも関連するが、私の学藝衆のもう一つのイメージは、時々行く喫茶店の円卓である。そこには大学の先生も職人もいて、普通にお茶を飲みながら世間話をしている。その中に京都の町内に詳しい方がいて、昔誰が住んでいたか、京都の中にある言葉の違い、最近使われなくなった言葉などを生き字引のように知っている。東京からの友人を連れていくと非常に驚かれる。市井の人がまちの歴史を語り、御池通の疎開の歴史など、どこにも書かれていなことを自分の知識として知っている。そういう知恵や知識が、毎朝コーヒーを飲みながら世間話の中で自然に出てくる。こうした話をフラットな関係でお互い学び合う。大学の偉い先生やご住職でも、フラットな関係であれば話が続く。これが偉大な田舎と言われる京都の良さである。

残念ながら、学生たちはそういうコミュニティに触れずに卒業してしまう。京都で生まれ育った子どもたちも、昔なら大人に連れられて触れられた世界に、今は時間やプログラムに追われて触れられない。我々世代も京都の良さを味わい尽くせていない。教育の中で華道や茶道を学校に取り入れ、窓口を開いているのは良いが、もっとやってほしい思いはある。しかし、学習指導要領や先生方の働き方の制約があるため、課外でやるもの一つの方法だ。教科に取り入れられれば良いが、難しいなら放課後や週末に、京都のまちの人々が横顔や後ろ姿を見せられる場を設けたい。一生懸命詰め込む教育よりも、石井委員がおっしゃったように横顔や後ろ姿を見せる場を作ることが重要だ。それを学校の放課後や週末、あるいはお寺や区役所などを使って場を設けられないか。だから私のイメージは上から目線ではなく、普段着で歩く人々の話を聞くことだ。京都の中心だけでなく、いろんな地域にそういう人がいる。少ない地域もあるかもしれないが、その場合は隣町から来てもらえばよい。子どもたちに窓を開けば、大人も出入りし、学び直したいと思う人も出てくる。これが私の学藝衆のイメージである。

さらに AI 時代においては、知識だけでなく身体体験をどう増やすかが重要だ。例えば、華道や茶道は知識だけではなく、その場において空間を体験しなければならない。AI が補えないのは身体性であり、これを教育の中でも重視しないといけない。京都のまちを歩く、自然に触れる。私が花背に行った日にも、熊が出たという話になったが、森に近づかないのではなく、どう用心し、どう対策するかを学びながら自然に触れることが必要だ。鴨川

を歩ける道を作るなどもまちづくりとしては重要であり、教育にそうした要素を取り入れることが大事だと思う。

【野口 教育委員】

課外でやるとなかなか時間が取れないと思うので、今おっしゃった部分のいくつかは探究の授業の中で盛り込めるのではないかと思って聞いていた。いろんな人から話を聞いたり、人を集めてみたり、自分から探していくことが課題になれば、少し科目の中でも取り入れられるのではないかと思う。

【濱崎 教育委員】

私は探究学習ではなく、科目に入れてほしいと考えている。それは、いきなりではなく、準備会のようなものを作り、3年計画や5年計画でモデル校から始める形が良いと思う。理科の教育でも全部ではないが、少しずつ今の京都を形作っている要素を取り入れたい。先ほどの紋様や香料の話のように、匂いを頭でどう解釈するかといったベースを取り入れができる。文化と科学は切り離せず、科学がなければ和菓子一つ作れないこともある。そういう形で教科の中に取り組んでいくことを考えている。

【松井 市長】

私は国語が好きだったが、一番知的刺激を受けたのは小学校一年生の時の現代文の先生である。先生は歌舞伎の顔見世興行の前に、今年の顔見世興行について話し、それを解説された。そして「これを見たかったら今度一緒に集団鑑賞しよう」と言られた。その語りが顔見世よりも面白かった。それが私の古典芸能への窓を開いてくれた。また、ある歴史の先生が夏休みの宿題で「御朱印帳でこれだけのお寺を回ってこい」と言られた。それが宿題だったおかげで、京都の名刹を見逃さずに済んだ。さらに音楽では、試験問題で「クラシック音楽のサビを30曲録音してこい」と言い、カセットテープレコーダーを持たせられた。それで私はクラシック音楽のサビの一番おいしいメロディーラインを覚えた。こうした刺激的な授業をしてくださった先生方のことをよく覚えている。

これは現場レベルの先生の工夫かもしれない。しかし京都というまちなら、これだけお寺があるのに、なぜそれを回って歴史を学ばせないのか。南座という歌舞伎の舞台がある京都で、なぜ古典文学のストーリーや文体を学ばせないのか。学校を超えて課外講座としてでも、京都にある溢れる文化資源を活用すべきだと思う。そうしたガイドがあれば、どんなに素晴らしいことかと思う。これを課外ではなく教科の中に取り入れられないのかと考えている。

【石井 教育委員】

今の話を伺って確信したが、それは教育課程の問題ではない。そこに入れたらおそらく

うまくいかないと思う。なぜなら学校教育は基本的にシミュレーションであり、本物にはなりえないからだ。英語や芸術もそうだが、特に伝統文化となると、それなりの巧みでなければ本当のおもしろさは伝わらない。教育課程に入れることで、偽物文化のように経験される可能性がある。

かつて高校の先生方の中には、大学で教えながら、あるいは社会科では地域の地方史研究会の会長を務めるなど、研究をしながら教えていた方が少なからずいた。ここがポイントで、教材研究とは先生方が研究することとほぼイコールだった。社会科の先生方は教科研究会で地域を回り、地域研究を行っていた。先生方同士が実践を共有するだけでなく、各地域に行ったり山に登ったり、京都ならではのフィールドワークをしたりして、それを教材研究として生徒に還元していた。

かつての高校の優れた先生は、学問・文化の香りがする先生だった。つまり本質は、先生方が学校外のサークル活動や研究会組織に参加し、学びながら授業をしていたことだ。だから垢抜け、学校くさくなかった。本物の研究や学問、文化、学藝をしていた。しかし今、その条件は急速に後退しており、学校外で学ぶ場がほぼなくなり、そうした活動は萎んでいる。

以前の教育委員会会議でも発言したが、先生方が学校内で、OJTで学ぶだけでなく、教科研究会などで集まり、教材研究や専門的な教科研究を専門的に行う。こうした取組をもっと広げることが必要だ。それが広がれば、状況は大きく変わらると思う。

【松井 市長】

そういう先生方が教材研究をして、その成果を教科以外の場で披露する、講座を持つといった可能性はあるか。あるいは、それでは中途半端で、本当にその道の専門家に任せたほうがよいのか。しかし、専門家はわりと寡黙で、伝えることが不器用な場合がある。学藝衆を考える中で一番大きな課題は、専門家が必ずしも伝えることが得意ではないという点だ。むしろ、今教材研究をしている先生方のように、教科として伝えるかどうかは別として、その世界に深く踏み込んでいる人が担い手になるべきだと思う。では、教科ではないとしたら、どんな形でどう引き込むのか。あるいはその専門家が伝えることの専門家でない場合、どのような人と組み合わせて子どもたちを巻き込んでいくのか。さらには生涯教育のように子どもたちが世界に関心を持って巻き込まれるようにするのか。それが私の一番の悩みである。

【石井 教育委員】

里山の発想はそれに近い。里山が自然と人の間にあって、それらをつないでいたように、かつては学問・文化と人々の間に多くのサイエンスコミュニケーターがいた。先日、青少年科学センターに行った時、懐かしいものを見た。理科の先生がものづくりをたくさんしていたのである。100円均一ショップは算数や理科の先生にとって宝の宝庫であり、いろん

なものを組み合わせて教材を作っていた。これこそが教材研究であり、サイエンスコミュニケーションの一環であり、展示物を作るなど、こうした活動があった。ザ・サイエンスコミュニケーターでなくても、チサインスコミュニケーターのような人がたくさんいた。

かつて田舎のみならず都市部でも教員は地域の文化的リーダーだった。教員養成系大学には各教科の専門家がいて、その方が教育と文化を担っていた。学芸大学という名称もそういった側面と関係している。そこが里山的な役割を果たしていたが、それが一気に崩れてしまい、今や教育というものが教え方や学び方に偏ってしまっている。文化の香りがしなくなったこともあり、教員のステータスも下がっている。それで言うと、広く文化の担い手であった教員がそうなっていないことが大きいと思う。先生方は日々目の前の子どもたちを相手にしており、また、教科の専門性が高い人が必ずしも良い教師になるとは限らないが、教材研究や内容研究を十分にしなくなり、マニュアル通りに教える形になっている。

笹岡委員の手引きで生け花を体験した時、非常に勉強になったことは、これは数学であるということ。すなわち、オーセンティックな学びであれば、生け花を科学するという形で学ぶことが可能である。他にも算額という証明問題を奉納する伝統があり、教科書にもこうした内容があるものの、それを扱える先生が減っている。それをきちんと扱える先生、あるいは扱おうと思う先生がでてくることがポイントで、だから私は生涯学藝社会と申し上げたが、先生自身が学び直し、学藝をすることで、自然と子どもたちにも投げかけることが出てくると考える。授業は学びへの導入であり、探究的な学びも、本来ならば学校から飛び出す子どもをつくることがポイントであった。京都基本構想や新京都戦略などをテーマに取り組んでいくのであれば、一度生徒たちと議論してみたらよいと思う。こういう学びは今でも可能であり、次の学習指導要領改訂でも子ども参加が重視されている。こういう流れに乗せていくながら、きっかけづくりは学校で行うが、その先の学校外の学びの場が、現状は習い事や塾ばかりで貧弱である。そうならないようにすることがポイントで、子どもたちの社会教育を大人たちの生涯学習と結びつけ、どう循環させるかが重要だと思う。

【松井 市長】

里山的な役割を担う人が、テーマごとのコーディネーターとして存在することが重要だ。そしてその方が自分も学びながら、学んだことを子どもたちに伝えていく。このように学藝衆構想は、子どもだけでなく、大人も含めてである。また、京都は比較的狭いので、各地域や学校で必ずしも講座を持つ必要はない。ただ、学校で「こういう講座がある」「これが京都の魅力だ」と先生方に知ってもらうことが大切だ。

例えば、映画を作る職人たちがどんな人なのかを現場で見せる講座があってもよく、京都は映画の都であることを広く伝えるべきだ。例えば、右京区役所で講座を開き、映画で

美術や照明などを手掛ける映画職人の話を聞ける場を作る。ただし、プロだけが話すと子どもたちは退屈する可能性がある。そこで、里山的なコーディネーターが入り、子どもや一般の方にどう伝えるかを工夫する。映画好きな子どもには「右京区に行ってごらん」と案内できるようにする。毎年映画講座を続ければ、モデレーターやコーディネーターもさらに知識を深めることができ、将来映画界を目指す方も出てくる。

こうした講座を分野ごとに展開し、そこに地域の特色を生かす。例えば、右京区は映画、伏見は酒、東山は歌舞伎など、地域ごとにテーマを設定する。講座を通じて、里山的な存在が子どもや一般の方に学びをつなぎ、導く仕組みを作ることが重要だ。

一番悩ましいのは、教育委員会だけではできない点で、役所横断で、区役所などをどう絡めて企画するかが課題だ。各部署にはそれぞれの仕事があり、行政部署にどう落とし込むかが難しく、どう推進するかが悩みである。

【石井 教育委員】

講座を開くとなると、誰かが提供しなければならない。大学生のサークル活動のような、大人のサークル活動的な仕組みで展開できれば循環型になると考える。奈良でダイワハウスと連携し、循環型教育システムを社会教育の中で色々やろうと工夫している。こうした社会教育や生涯学習みたいな形で連携させることが重要だと思う。

学校は今、先生方に余裕がなく、先生方自身が学ぶ機会や時間もない。これから公教育の最大の問題はいるべきところに人がいない「歯抜け状態」となること。担任制が維持できず、チーム担任制にせざるを得ない状況もある。京都市は定員が充足しないところに人を配置できるよう条件整備がしっかりしているが、その基盤の上に教育委員会は、まず学校教育に余裕を生み出す必要がある。その上で先生方が余白を持ち、自分たちで学べる場を確保することが大切だ。

その上で、先生方がやりたいこと、好きなことを学べる場があり、自分のやりたいことや好きなことを学ぶ経験が大人にも生まれれば、それに子どもたちも巻き込まれる。親が参加すれば子どもも一緒に参加する。サークル活動やサークル的な場、かつて喫茶店が果たしていたパブ的役割が重要だが、今はそうした場所が減っており、いろいろな職種や文化圏の人々がフラットに集うパブリックな場が弱くなっている。

【松井 市長】

おっしゃるとおり、そこには上下関係がなく、愛好家が集まり、堅苦しくない学びがある。それが文化の厚みであり、京都にはそれが圧倒的にあるが、実は京都の人はその豊かさを自認していない。他のまちにはあまりなく、地方から来た人や、私のように他のまちで一定期間過ごした人はそれに気づく。東京のように刺激が多い都市でも、こうしたパブ的な場はない。いろんな人が集まり、横並びで談論できる場があり、しかもそれがみんな好きでやっている。

場所は喫茶店でもよいが、そういう場がどんどん減っている。銭湯もなくなり、パブリックなサークルも消えている。さらに、市役所職員の中には、この分野は人生をかけて好きだという人がおり、祭りなら一生懸命やる人も多い。こうした話は大都市では珍しい。だから、ボランタリーな活動を持続可能な形でまちに定着させることが重要だ。減びゆく存在をどうテコ入れするか、代替物をどう作るか、パブリックな場をどう再構築するかがテーマである。このテーマを行政にどう組み込むかは難しい。単に制度化すると好きというボランタリーな部分が失われる可能性がある。好きな分野を研究し、それを子どもに伝えるのが好きという先生もいる。教育課程から離れた活動にする方が、この構想の本質に合うかもしれない。

【笹岡 教育委員】

京都市は非常に手厚く教職員の人的支援をしているが、日本語指導教室わかばや青少年科学センターなどを訪問すると、もっと人的支援が欲しいという声を聞く。もちろん予算の制約があるため難しい面もあるが、教育活動は人がいなければ成立せず、先生方をどう集めるかが肝だと思う。

先日、ある和菓子会社の社員さんに聞いた話で、若い工場職員が辞める理由を聞くと「もっと人と接しない仕事がいい」というものだったそうだ。工場はほとんど機械で人と接しないのに、さらに入れと接しない仕事を求めるという状況である。コロナ禍もあり、人と接する機会が減り、恥ずかしさを感じる人も増えているのだろう。社員の要望を何でも聞くことで人材を確保している会社もあるようだが、学校の先生の場合はそうはいかない。ただ、教員免許を持つ人、持たない人を含め、いろんな人が子どもたちに関われる仕組みを考える必要がある。できることとできないことはあるが、議論の土台にはのせるべきだと思う。

さらに、海外にルーツを持つ子どものサポートとともに、親への支援も大切だ。現状でも学校は出来ることには取り組んでいるが、先生が対応するには限界がある。これを全局的に考えていくことが、非常に重要だ。

【吉田 副市長】

私も最初に市長から学藝衆の話を聞いた時は、どう解釈すべきか難しかった。どの部署に位置づけるかも定まらないのは、学藝衆の捉え方が幅広く柔軟で、どこかに固定できないからだと思う。

この夏、高瀬川の清掃活動に参加し、地域の人やお店の人、もともと活動している人と一緒にゴミを拾ったが、マスコミの宣伝もなく、ただ京都のまちをきれいにしたいという共通の思いだけで皆が動いていた。こうした人々も学藝衆の一つだと感じ、学藝衆は広く捉えればよいと思った。

学藝衆構想を進める中で、教育委員会に期待するのはスポーツや文化、伝統文化の継承

だけでなく、そこに深く入り込み、自分の考えをまとめて行動する力を育てることだ。これは探究活動に近い。清掃活動をする人も、自分で考え方行動している。こうした力を育てる観点で教育委員会に関わってほしい。

データ集 11 ページのウェルビーイング調査では、京都市の中学生は「将来に夢や目標を持つ」「地域や社会をよくするために何かしたい」という項目の数字が低い。学藝衆の取組でこうした数字が上がる可能性がある。また、12 ページにあるように、支援を必要とする子どもがいるが、こうした活動で子どもの良さを発揮できると思う。

最後に、学藝衆構想の活動場所について、石井委員が言われた里山的な場は、教育委員会で議論している部活動の地域展開もその一つだと思う。地域クラブに加え、放課後クラブも考えており、子どもの興味関心に応じた自由度が高い取組を想定している。以前、総合教育会議で部活動の地域展開を議論した時は教員の負担軽減が目的であったが、教育委員会で色々と議論していく中で「京都の子どもをどう育てるか」「京都の魅力である文化を生かす地域展開」にまとめられたと理解している。

図書館も学びの場だけでなく、地域コミュニティの場として垣根を低くして活動している。こうした場所を使いながら、子どもたちに何を伝えるかを考えていくことが重要だ。

【尾崎 総合企画局長】

構想自体に余白や隙間をあえて残しているが、本日の会議の議論を通じて、それぞれが京都の未来を考えることが重要だと改めて感じた。これは大人だけでなく、未来を担う子どもたちも含め、それが自分自身のあるべき京都を描くことが大切だと思う。

次に学藝衆構想について、京都は生活文化が大切であるとともに、文化は嗜みであると考える。特別なことに取り組むのではなく、知らず知らずのうちに自然や季節を感じるといったことが身につく。そのために、まずは存在を知り、触れ、馴染み、いざれは自分の好きなものを見つけて、自分自身の中で極めたいことを見つけることが大切である。

【平賀 文化芸術政策監】

大人と子どもの関わりが、私たちが子どもの頃に比べて減っていると思う。子どもはとても忙しく、また、親や学校、習い事の先生など限られた大人との関わりの中で成長している。忙しさの中で効率を求める生き方が子どもの頃から身についている、そのような状況が多くあるのではないか。

要するに、大人との出会いの場をどう作るかがポイントだと考える。子どもの頃、嘘ばかり言うおじさんがいた。半ば信じて友達に話し、恥をかいたが、そうした経験を重ねて本当と嘘を見極める力を養えたのではないかと思う。評価はできないが、そんな気がする。

学藝衆という言葉からは立派な人を思い浮かべるが、説得力のある話ができる人と関わる場を子どもにどう作るかである。そこで見極める力を養うことができる。人生のベテランが集まる場を設けそこに行けば面白い話が聞ける、あるいは学校の宿題でも、AI に聞い

ても答えが出ない、誰かに聞かないとわからないような仕掛けを作るのも1つの案だと思う。これは教育現場だけでなく、区役所や関係部署など、あらゆる部署の役割だと感じる。

(3) 閉会

【稻田 教育長】

京都基本構想、そして学藝衆という取組は、これまで京都市の教育が先進的と言われる中で、それをさらにアップグレードする非常に大きなチャンスだと思っている。

その中で大事なのは、まず先生の余裕である。昔は小学校の校長先生に、きのこの第一人者や世界中の貝を集める方など、個性的な方がたくさんいた。しかし今はカリキュラムに基づいた教育を子どもに提供しなければならないという意識が強く、こういったことがなくなっている。先生方が個人研究できる環境を整えることが必要だ。

また、学校外や先生以外からの学びは子どもにとって非常に大きい。高校生の能楽鑑賞教室で、200人ほどの市立高校生に歌舞伎について問い合わせた。教育基本法改正以来、伝統文化は教科に取り入れられ、音楽の時間にも歌舞伎や文楽、狂言が出てきており、知識としては学んでいるが、あまり定着していない。能楽鑑賞教室の際、演目が歌舞伎にあるものであったため、「これが歌舞伎にある演目だと知っているか」と聞くと「知らない」という反応だった。一方、「最近人気の歌舞伎に関する映画を見たことがあるか」と聞くと8割が手を挙げた。学校外で学ぶ身近なもの定着は非常に大きいと感じた。

市長から紹介があったが、私は全国コミュニティスクール連絡協議会の会長を務めており、先週は仙台、昨年は金沢で取組事例を見たが、地域の方々による子どもの育成と、地域の発展が両立する形で実践されている。金沢や仙台は京都と違い、藩主がいた都市であり、京都のように自治を重ねてきた地域とは異なる。京都の地域力は高いが、都市化で衰退してきており、この力を学藝衆やコミュニティスクールで回復できないかと考えている。

この議論を、部活動の地域展開も含めて、京都の教育のさらなる充実につなげたい。

【松井 市長】

京都のコミュニティスクールは日本国内で非常に高い評価を受けている。京都は地域の力で学校を良くしてきたが、地域の力は高齢化などで低下し、今は学校が基軸となって地域を良くしていく「スクールコミュニティ」をどう作るかが課題である。当初は学区単位のコミュニティを想定し、部活動の地域展開を含めて学校をどう活用するかという視点だったが、今日の話を聞きし、大人と子どもが一緒に学ぶことは非常に重要であり、そこに里山的機能を果たす人がいれば素晴らしいと思う。そういう意味では、まち全体がコミュニティスクールからスクールコミュニティへ、つまり学びの共同体をどう作るか。そ

れは学区単位の場合もあるが、むしろまち全体で、大人と子どもが一緒に学ぶ場をいかに多く提供するかが重要だ。例えば、鴨川や高瀬川をきれいにする活動を通じて、まちを美しくする意味を、大人と子どもが一緒に学ぶこともあるだろう。庭づくりでは寺院の協力を得て、日本庭園が誰によってどう作られるのか、庭師や僧侶の役割、建築や景観との関係を学ぶこともできる。こうした学びを通じて、大人は自分の好きな分野で専門性を高め、その姿を見た子どもが将来その世界に興味を持つ。仏教徒になる人も、建築家になる人も、作庭家になる人も出てくるだろう。

京都にはこうした講座を数多く作れる圧倒的な特徴がある。これを入口として教育課程に位置づける方法もあるかもしれないが、課外の活動にどう位置づけるか。学校は、子どもにこのまちで育つこと、このまちで学ぶことの意味を示し、まち全体で大人と子どもが一緒に学ぶという、学校だけでは担えない、先生だけで担えない部分で、それぞれの専門家をどう巻き込んでいくのか。子どもと大人が一緒に学び、広い意味での「藝」、つまり社会の生き方を含めて学ぶ。そういう学藝衆構想があるということを、今日の議論を通じて感じた。

本日は非常に貴重な機会をいただき、長時間にわたり本質的なご意見を議論いただいたことに心から感謝申し上げる。